

いるかの学校阿い弘之

いるかの学校

阿川弘之



文藝春秋

いるかの学校

昭和四十六年十二月五日第一刷

著者 阿川弘之

発行者 檉原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

郵便番号 一〇二

東京都千代田区紀尾井町三

電話 東京二六五局一二二一

振替 東京七八七四三

印刷所 大日本印刷

製本所 中島製本

定価 六〇〇円

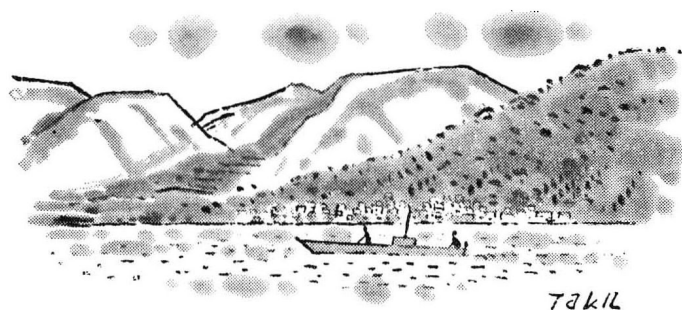
© 1971 Hiroyuki Agawa
Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合は
お取替えいたします

0093-302230-7384

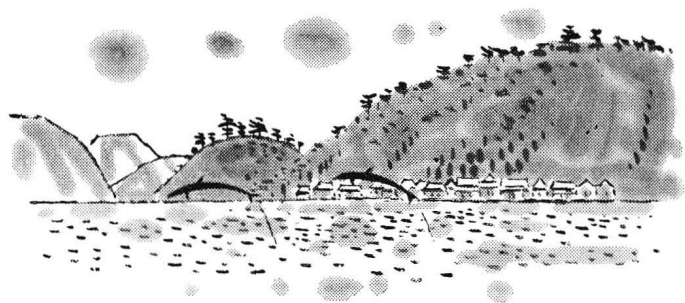
いるかの学校 目次

点呼通信	5
死化粧	19
幽霊事件	38
酒は正宗	61
小春日	77
パンティ泥棒	97
年末年始	126
しし鍋	152
亀の小便	167
日曜日	186
とろける	203



Takil

夢	枕	220
浜の真砂	236	
毛の値段	257	
どっちもどっちも	280	
海軍記念日	293	
動物盗	315	
空港ロビー	331	
夏は来ぬ	356	
見合い	377	
妃殿下の水泳	400	
お梅狂乱	414	
親子井	425	
船出	440	



い
る
か
の
学
校

装幀・挿画
目次
カッ
ト

秋野卓美

点呼通信

岸にもやった小さな釣舟が、さびだらけの煙突からボンボン、ボンボン、煙の輪を吐き出している。

舟の中では、きたくないシャツを着たごま塩頭の男が、仁王立ちになってひとりで何かどなっていた。

「何とかウオー、何々ウエー」

意味はよく聞きとれない。

港はうすい朝もやだ。

「浜木綿崎漁業協同組合」と書いたからの木箱が、コンクリートの岸壁に高く積み上げてある。

その横にしゃがんで漁港の朝景色を眺めていた浴衣がけの若者が、

「何を言ってるんですか、あの人？」

と、かたわらの漁師の爺さんに聞いた。

「あ？」

「あの人、何ですか、一体？」

赤銅色に潮やけのした爺さんは、やにのたまった眼で沖の方を見やりながら、

「ああ、次長さんか？　ありゃなにしろ気持ちがいで」と、無表情に答えた。

「ふうん」

宿の浴衣を着た若者は、納得のいったような顔をした。

「気持ちがいか。このへんには昔から頭のおかしい人間がたくさんいるとは聞いてたが、やっぱりそうかねえ」

「次長さん」を名前と思って、「次郎さん」とでも聞きちがえたらしい。

「何だね？」

爺さんが言った。

若者は、土地の人に対して失言したかなと思った様子で、

「いや」

と口を濁した。

幸いしかし、爺さんは耳が遠い。

「どこから来たか？　おめえ様」

と、別のことをたずねた。

「東京」

「泳ぎか？」

「海水浴は、水がつめたくてもう駄目でしよう。大勝館で徹夜麻雀をやつて、スッテンテンにされてしまったんです」

「あ？」

「大勝館でね、仲間と徹夜で麻雀して、財布がカラになつてしまったの」

若者は大きな声で言つた。

「ああ」

「気が立つて寝られもしないから、浜へ散歩に出て来たんだが、あんな気がいいを舟に乗せて大丈夫なんですか？」

漁師は不思議そうな顔をして、若者の方を見た。

「気がいいって、おめえ、何もほんものの気がいいじゃないさ。釣り気がいいの海軍気がいいの、浜木綿崎署の名物次長だわ」

「釣り気がいいの何気がいい？」

「海軍気がいいよ。昔の海軍のことになるてえと、何だつてむやみに血道を上げるだから」

「それで、何の次長だつて？」

「ここの本署の次長だ」

「警察の？」

「ああ」

「冗談じゃないよ、小父さん。それなら早くそう言やいいじゃないか。いやだなア、俺」

若者はしかめ面をした。

警察の次長に徹夜麻雀の話など、大声で聞かす馬鹿があるものか。

「帰るよ、俺。帰つて温泉へ入つて寝よう」

若者は宿の下駄を鳴らせて、そそくさと立ち去つて行つた。

釣舟の中では、ごま塩頭がまた吠え出した。

ふつうの者には、

「ウオー、ウエー」

としか聞えないが、それは、

「表はなせエ。両舷後進微速。とオリ舵」

とどなっているのであつた。

軍艦が港を出て行く時の、海軍式号令詞である。

起き番（当直）あけ、秋のはじめの休日の朝、格別な事件さえおこらなければ、これからたっぷり半日釣がたのしめる。

いい機嫌の八十島次長を、舵を握つた秋沢巡査はにやにやしながら眺めていた。

「海を見ると、次長はどうしてこう気分を出すんだらうな。日本海軍なんて、俺の生れる前の年に負けて滅んでしまったんじゃないか」

と思うが、度々のおつき合いで、門前の小僧式に海軍の号令の五つや六つは、自然おぼえてしまっている。

「艦長、表も、やい、レッコーしました」

調子を合せてみると、果して次長は世にも嬉しそうな顔になり、

「艦橋了解」

と叫んだ。

「取舵いっぱア」

定員五名の釣舟に、「艦橋」も「両舷後進」もあったものではないが、秋沢巡査が焼玉エンジンのギヤを入れたので、ボンボン、ボンボンと、舟はへさを左に振って進みはじめた。

「次長」

「何だい？」

「軍艦どっこもいいですがネ」

「なに？」

「軍艦どっこもいいけどサ、この前みたいに坊主はごめんですよ」

坊主というのは不漁のことである。

「いや、きょうは釣れる。こういうも、やのかかった薄ぐもりの日がいいんだ」

八十島次長は自信ありげに答えた。

浜木綿崎警察署次長八十島仙吉警部、同警務課勤務秋沢五郎巡査といえはいかめしく聞えるけれども、二人とも首にタオルを巻いて、何だかのんびりした顔をしている。

あまり深刻な事件がないせいだろう。浜木綿崎署の留置場は、たいていいつもからっぽなのであった。

朝もやの中で、黒い大きなものはねた。つづいてもう一つ、同じ黒いものがはねた。

「ちょっと点呼通信をやるか」

八十島次長は言った。

はねたのはいるかである。

何カ月か前、二頭のいるかが迷いこんで来て、それきり浜木綿崎の港内に棲みついている。どうやら夫婦ものらしい。

湾の口は外海へひらいているのに、いるかの夫婦がなぜ逃げ出さないのか不思議だったが、ムツゴロウ先生という学者の動物随筆によると、いるかでも石鯛でも、海の生きものはみんな、温泉が大好きなのだそうだ。

温泉がなければ真水浴びでもいい。

彼らはからだにとりついた寄生虫の駆除治療を目的に、海底温泉や河口の真水をしたって集って来る。

浜木綿崎は温泉地だから、もしかすると湾内に温泉の湧出している場所があって、いるかの夫婦は湯治中なのかも知れなかった。

「やつら、ちゃんと心得て、待ってますよ」

秋沢巡査が言って、エンジンをしぼった。

八十島警部は、棒きれで舟ばたを叩きはじめた。

「トオン、トントントン。ツー、トン、ツー、トン。トン、ツーツーツー」

祭太鼓の練習でもしているように聞えるが、これはれっきとしたモールス符号で、片仮名に直せば「ハニ一」——潜水艦のコール・サインである。

「ハニ一、ホへ、ニカ四」

「ハニ六、ホへ、ニカ四」

通信科分隊の先任下士官、元海軍上等兵曹八十島仙吉は、戦争中潜水艦隊司令部に勤務していたころ、よくこの点呼通信をやらされた。

「コチラ第二潜水艦隊司令部。伊号第六潜水艦応答セヨ」

「ハニ六、ハニ六。伊号第二十七潜水艦応答セヨ」

どこか遠くの海で隠密行動をしている味方の潜水艦を呼出して、安否をたしかめる通信である。

船はふつう、呼出しの無電を聞いたたら、「ツー、ト、ツー」という「応信符」を出す。しかし敵の逆探知を極力避けねばならぬ潜水艦では、「ツー、ト、ツー」でも長すぎて危険であった。

潜水艦が点呼通信に答える時は、

「トン」

と、短符一つにかぎられていた。

モールス符号をおぼえるには、ちよつとした要領がある。
ごうりょうもん
合調音といって「イ」の「ト、ツー」を「伊藤」という風におぼえる。「ロ」は「ト、ツー、ト、ツー」だから「路上歩行」、「ハ」は「ツー、トトト」で「ハーモニカ」とおぼえる。

馴れて来ると、「ツー、トトト」と聞いた瞬間に、指先の鉛筆が「ハーモニカ」の「ハ」を書きとってしまっている。

短符一つは「へ」で、合調音はすなわち「屁」であった。

「ハニ一、ハニ一、ホへ、ニカ四」

「伊号第六潜水艦応答セヨ」

そこで遠いかすかな音が、

「屁」

と入って来ればしめたものだ。

「伊六潜応答しました。健在であります」

ところが、毎偶数時の点呼通信に応答しない潜水艦が出て来る。

午前二時、応答ナシ。午前四時応答ナシ。朝六時になっても「トン」が入らない。

三回くりかえして答がないと、その潜水艦は沈没したものととして処理されてしまう。

八十島元兵曹の心の中には、還って来なかった戦友たちの顔がうかんでいた。

黒いいるかが、何だか小型潜水艦のような気がする。

いるかは賢い動物だそうだが、モールス符号を暗記するほど賢くはない。

しかし彼らは、今ではいぶん土地の人に馴れて、舟ばたを叩く音がすれば餌をもらえることを知っていた。

八十島次長が、

「トン、ツー、トン、ツー」

と点呼通信をやっていると、とろりと風いだ港内の海水を割って、いるかの鼻先が二つ、釣舟のそばへあらわれた。

「来た来た」

「待て待て」

舟の上の二人は、バケツの中から冷凍いわしをつかみ出して、かわるがわる口に入れてやった。

眼が小さく口が奇妙なかたちをしていて多少怪物じみて見えるが、あごの下を撫でてやると、二頭とも心地よげに鼻面を出してじっと浮んでいた。

「可愛いもんですな、次長」

冷凍いわしをくわえさせてやりながら、秋沢巡査が言った。

「可愛いもんだ」

八十島警部は相槌を打った。

「昔、四国の宿毛沖などを航海していると、いるかがよく艦隊を追いかけて来たよ。艦の横に並んだり、へさきの方でおどり上ったりして遊ぶんだ」

「また海軍の話ですか」

「またって、君……、犬みたいでしたしみがあるから、海軍の兵隊はいるかは決して殺さなかったもんだ」

「……」

「僕はだから、釣は好きでもいるか漁というやつは、どうも性に合わないな」

「はあ」

「しかし近ごろは、浜木漁崎の漁師も、前みたいにむやみにいるかを叩き殺さんようだね」

「生かしといた方が、各地の水族館にいい値で売れるからですよ」

秋沢巡査は言った。

「さて、そろそろ行くか」

「行きましょう」

焼玉エンジンの音が高くなった。

八十島次長はいわしの匂いのついた手を海水で洗い、手拭でふきながら、

「給食おわり」

と、いるかに向って言った。

二頭のいるかは、その言葉を理解したように、身をひるがえして海の底へもぐりこんでしまった。

ちよつと間があつて、彼らは「ご馳走さまでした」と言わんばかりに、舟のはるかうしろの方ではね上つてみせた。「ああやって、ここに棲ませておいてやった方がいい。殺したって肉は不味いし、撲殺したいるかというやつは、マグロと同じでいい気持のもんじゃない」

マグロとは、警察用語で斃死体のことである。

舟は灯台の横を抜けて外海へ出て行きつつあった。

白い灯台わきの突堤で釣をしている男がある。

「おおい、次長さんかよオ？」

と、釣師は声をかけて来た。

氷屋の鈴木のだねだ。

「きょうは何だよオ？」

「そうだが、つおをやってみるつもりだア」

八十島次長は舟の中からどなり返した。

「そつちは食うかねエ？」

氷屋は「駄目々々」というように、防波堤から手を振った。

「こちらはサ、五貫目ほど揚げて来るつもりだから、釣れすぎたら氷を頼むぜエ」

「そんなに釣れたら、氷はただで進呈するよオ」

防波堤と灯台と氷屋のだねの姿とが次第に遠ざかつて行く。

朝もやの中、南に潮見崎の鼻があり、北は安浦、中湊、五色川とつづく半島沿いの小さな漁港である。

もっとも、屈曲した高い崖と切り立った岩山にさえぎられて、それらの町は見えはしない。

「次長ぐらいになつても、マグロを扱うのはやっぱりやですかネ？」

安浦の突端を目じるしに釣舟を走らせながら、秋沢巡査が質問した。

「そりゃあ君、仕事の時はいやもいやでないもあつたもんじゃない。しかし、マグロの始末をするのがめしより好きだというような警察官はやっぱりおらんだろう」

潮はきれいに澄んでいる。

防波堤を出はなれてしばらくは、底の岩や藻のまわりで泳ぐ小魚の群がぼんやり見えていたが、やがて海は深い紺色に変わり、釣舟は沖をさしてボンボン、ボンボン、調子よく走り出した。

「安浦の鼻と潮見崎の鼻が直線にならんだら教えろよ」

ひざの上で仕掛けをこしらえながら、八十島次長は言った。

「はい、分ってます」

舵を握った秋沢巡査が答えた。

「ところで、次長がはじめてマグロを扱ったのはいつごろのことですか？」

若い秋沢五郎クンは、マグロの話にまだ興味があるらしい。

「それはな」

八十島警部は、老眼鏡をかけて、化かし鉤と糸の具合を

たしかめている。

「忘れもしないが、僕が巡査を拜命して警察練習所を出て、ちょうど一週間目のことだよ。しとしと雨の降るいやな晩だったね」

「県警本部にいたんですか？」

「当時県警本部なんてあるもんか。進駐軍命令の自治体警察だから」

「はあ」

「国鉄天神川の駅のある天神川村の警察署で、署長以下定員七人というところだ」

「……………」

「僕の身分は村役場の書記と同じだ。村の警察サね」

「雨がしとしと降ってたんでしょう？」

「うん。雨がしとしと降ってた。電気はしよつ中停電するし、なにしろ陰気な晩だったよ。君なんか、まだ赤ん坊でおしめをして……………」

「それで、雨が降ってどうしたんですか？」

「国鉄の駅から、今飛びこみ自殺があつたからすぐ来てくれという知らせが入ったんで、当直の僕がかけつけたんだ」

かけつけてみると、天神川の駅から西へ五百メートルほ

ど行つた天神川鉄橋のたもとに、バラバラの胴と手足が、もうこゝをかぶせて置いてあつた。

「若い男らしいが、身元は分らん。そのころのことだから、棺桶の用意もすぐにはととのわない」

保線区長や合羽を着た保線工友が四五人集つていたが、「お巡りさん、野犬が足なんかくわえて行つても困るし、御苦労だが一つ、朝までここでマグロの番をしてやつてほしいんですが」

ということになつて来た。

新米の八十島仙吉巡査は、戦場で戦友のむざんな遺体を始末したことは何度もあるが、鉄道自殺のバラバラ死体ははじめてで、やっぱり気持が悪い。

それでも仕方がないから、一応マグロを^{あらた}検めたあと、覚悟を決めて線路わきの砂利の上に坐りこんでしまった。

「鉄道の連中が帰つてしまつと、マグロと僕と二人きりだ。どんな理田で自殺したのか知らんが、淋しかっただろうナ、可哀そうにと、気味も悪いけど、段々マグロにへんなししたしみがわいて来る」

「はあ」

「保線区長が気の毒がつてドブロクの一升瓶をおいて行つてくれたので、茶碗でそれをグビグビやりながら、雨の中

でお通夜さ。遠く人魂みたくに下り本線の青いシグナルが光っている」

「文学的ですね」

「何が文学的なもんか。あすこは君、当時だつて夜じゅう貨物や急行列車が通過する」

「はあ」

「それが君、急行列車にはトイレがあるだろう？」

「そりゃあ、あります」

「急行が通過するたびに、トイレの液体がバアッとしぶきになつて僕のからだに降りかかつて来るんだ」

「……」

「バアッだけじゃなしに、時々バチャツと来る」

「きたないねエ」

秋沢巡査は笑つた。

「笑いごとじゃないよ」

八十島警部は言つた。

「暗い雨の晩で、茶碗の中へ何が飛びこんでいたつて見えやしない。酒を飲むのも段々いやになつて来た」

「はあ」

「どうして俺は巡査になんかたんだらうと、その時つくづく思つたね。——それが僕のマグロを扱つた最初の経

「驗だ」

「……………」

「しかしなあ、秋沢君」

「はあ？」

「遺族の気持を考えると、マグロでも何でも、人の遺体というものは出来るだけ丁寧に取扱わなくちゃいかんぜ」

「それはそうでしょうが、もうやめましょう」

秋沢巡査は言つた。

「あんまりそんな話をしていると、きょうあたり管内でマグロが出そうないやな予感がします」

「話せというから話してやつてゐるのに、失敬な奴だ。しまあいいや。そのことは、今度あらためてゆっくり教育してやる」

舟は安浦の鼻と潮見崎をまっすぐ見通す線まで出て来ていた。

立ち上つて左右をにらんでいた八十島次長は、

「よおし。潮見崎の突端を正横せいおうに見て面舵おもて十度にとれ」と命じた。

また軍艦ごっこかと言わんばかりの顔をして、秋沢巡査が、

「何ですか？」

と聞き返した。

「そろそろ商売はじめようというんだよ。道具を流しながら、少ウし右へ舵を切ればいいんだ」

そうだがつおを釣るには、舟を四ノットくらいのスピードで走らせつつ仕掛けを流すのである。

港の中はベタ風ぎだったが、ここまで来るとやはりゆるやかなうねりがあった。

「少しヨタが来てますね」

秋沢巡査が言つた。

よその土地から浜木綿崎署に転勤になった警官は、初めのうち、ヨタが来たとか来ないとかいう話を聞かされて、さては町にやくざが潜入したかと思ひがちをやるのだが、これはこの地方特有の方言で、うねりのことなのである。

「君、このぐらいのヨタ、大丈夫か？」

「僕は大丈夫ですが、次長、どうですか？」

「うん？」

「この前、署長と二人で鰻釣りに出て、ヨタにやられてゲロ吐いたって、署内で評判ですよ。署長は陸軍だからあれだけど、帝国海軍の鬼軍曹でも、やっぱり舟に酔うですかネ？」

「馬鹿な。海軍に軍曹があるか。あの日は出かける前にさ

つま辛を食いすぎたからしくじったんだ」

八十島次長は言つて、ロープを流しはじめた。

白く塗った十文字型の板きれが、ロープの中ほどに結びつけてある。

それが波を切つて、舟のうしろからついて来る。この板きれがグツと沈みこんだら魚が食いついたしらせだ。

二枚の板を引っぱりながら、二人は釣舟を走らせていた。

「食いませんね」

秋沢巡査が言つた。

「食わんね。いつもはここで面白いほど釣れるんだが」

「寝てるんじゃないですか、まだ」

「魚がかい？」

「魚が」

「そんな馬鹿な」

八十島次長は言つた。

「なぜですか？」

「なぜつて、魚には夜釣りということもあるじゃないか」

「それじゃあ、魚は一生寝ないで泳いでるんですか？」

「……」

「警察官は何でもウラを取らなくちゃいかなでしよう」

ウラを取るとは、裏づけになる証拠を確認することであ

る。

「魚が寝てないというウラがないですよ」

「フン。今度研究しといてみよう」

その時、秋沢巡査が、

「あ、来た」

と叫んだ。

板がぐうつと波間に沈みこんだのだ。

「来たか。ゆつくりたぐれよ」

ロープをたぐり上げてみると、化かし鉤の先にかかつていたのは褐色の藻である。

秋沢巡査は舌打ちをして藻をはずし、ふたたび仕掛けを

海にほうりこんだ。

釣舟はヨタにゆられながら、大きな円をえがいて走って

いる。

「君、ローリングとピッチングということを知ってる

か？」

「舟がゆれることでしよう」

「そうだ。こういう風に横からヨタをくらって横ゆれする

のがローリングで」

八十島警部は説明した。

「もう少し右へまわつて、舟が正面から波に乗るとピッチ